

院長 和田誠基が

糖尿病・内分泌の患者様を
診察するわけ

第六部

子供2人を連れての
オーストラリア生活

今回はメルボルンでの2年間を妻雅代の視点から回想させて頂きます。

帰国を目前にした1995年9月、メルボルン現地校で長男Yukiを表彰するので朝会に招待しますと言われました。息子の雄樹はGlendal Primary Schoolの全体会で“Student of the week”（今週一番に努力した生徒）に選ばれ、お友達に拍手で迎えられ、晴れやかな笑顔を見せてくれました。長いトンネルを抜けメルボルン・コミュニティーに受け入れられたという感慨に耽りました。



Student of the week

基礎医学研究のために留学するという主人の決意を受け、1993年10月よりオーストラリアに向かう高揚感と幼い子供二人を連れての不安な実生活がスタートしました。主人が述べましたように一足早く、防衛医大の河野先輩がメルボルンにいらしていたので、到着1週間は家族で居候しました。不動産屋、カーディーラー、学校を奔走し、ライフラインをどうにか確保しました。最初の先制パンチはオージー・イングリッシュが聞き取れないことです。私は以前、高校で英語教諭をしており、ヨーロッパ、アメリカの海外留学も経験し、聞き取り能力があるつもりでしたが、独特のオージーなまりは分からないのです。例えば88の数字もアイティー・アイトと発音され、機関銃のようにまくしたてられ、確認が必要です。業者との車の購入や借家の契約も緊張したものです。住まいと子供の学業環境を整え2週間後のことです。毎朝登校時に腹痛や嘔吐が出たり、友達と物の取り合いの末、肩越しに噛みついて学校から連絡を受けたりと、長男雄樹には言葉が通じないためにおこる様々なトラブルに見舞われました。主人を研究所に送り出し、午前中の家事を終えた後は、2歳になる娘(貴美子)をおぶりながら、様



子を学校のフェンス越しに覗きに行ったものです。一人で砂場で遊んでいる姿を見ては、可哀想で涙したのを思い出します。息子が最初に発した英語は“Go away!”（あっちへ行ってよ）。これには母としてショックでした。恐らく白人のお友達から言われ続け、身をもって覚えた英語なのでしょう。香港の主権が返還されるのを前に、当時オーストラリアはアジア(特に香港)から多くの移民を受け入れていました。英語を母語としない子供たちが集まる公立の語学学校(Blackburn English Language School)への一時的転校を勧められ息子は1年間そこで過ごしました。香港、中国、フィリピンの友人達とオーストラリアで生活する基礎を学んだのです。私生活の中にも英語が盛り込まれるようになり、英語で寝言を言ったり、スリランカ人の友達の家に泊まりに行くなど、言語の壁は消えていきました。

1年間の語学学校を終え、現地校のクラスに復帰した時はクラス全体が“Welcome back, Yuki!”と迎えてくれました。そして学期最後の表彰式が冒頭の場面です。3歳の娘と共に喜んだのを覚えています。

東京という雑踏の中で育った私にとって、ワークライフバランスのとれた生活スタイルを体験できた貴重な期間でした。主人は暇を見つけるとオーストラリア各地の旅行を企画し、私は炊飯器を持参しながら子供とついでに行きました。サウスモール・アイランドでの1週間はバカンスの過ごし方が分からず、リゾート生活の仕方を学びました(笑)。主人は日本での住居確保のために、一足早く帰国。現地での友人の助けを借りながら私が引き揚げ作業を担当しました。当時お世話になった友人達とは今でも家族ぐるみのお付き合いが続いており、日豪を行き来しています。次回は主人にバトンを戻し防衛医大教官としての経験などを聞きたいと思います。

和田英語教室
和田 雅代